

平成七年歌会始御製御歌及び詠進歌

歌

御製

人々の過しし様を思ひつつ歌の調べの流るるを聞く

皇后陛下御歌

移り住む国の民とし老いたまふ君らが歌ふさくらさくらと

皇太子殿下

人々をへだてし壁はくづれたりベルリンに響く歓びの歌

皇太子妃殿下

夕映えの沙漠の町にひびきくる祈りの時をつぐる歌声

文仁親王殿下

夏来たり人々集ふ日光の菖蒲ヶ浜に響く歌声

文仁親王妃紀子殿下

言の葉をつらねてうたふ遊びうたわが子のこゑは明るくひびく

清子内親王殿下

生くるものら命の歌のとよもしてあした苑生そのふに光みちくる

正仁親王殿下

涙して歌ふ歌声に送られてをとめらは今看護婦となりぬ

正仁親王妃華子殿下

帰国する飛行機にのりてやすらぐかいつしか童謡をわがうたひをり

宣仁親王妃喜久子殿下

學びやに後の宮を迎へまつり金剛石の御歌うたひぬ

崇仁親王殿下

古の人の心ぞ知られける三十一文字の書ひもときて

崇仁親王妃百合子殿下

歌かるたとる手鈍れど友どちと笑ひさざめき老いを忘るる

寛仁親王妃信子殿下

青空の高く澄みたるこの朝心も晴れて歌口ずさむ

憲仁親王殿下

新嘗の夜の齋庭に樂師らの歌朗々とながれくるなり

憲仁親王妃久子殿下

冬の陽のさし入る部屋に子ら三人並びすわらせ歌かるたよむ

召人 五島 茂

大み歌につかへまつりて年長しけふの大み歌仰ぎまつらく

選者 千代國一

柴笛に歌を吹きつる少年のかなしみ遠く父母のいましき

選者 田谷 鋭

読みすすむ防人歌さきもりうたにあらはれて分きても親しふるさとびとは

選者 武川忠一

湿原の浮島に斑雪はだれ残りをり友らと歌ひ若かりしかな

選者 岡野弘彦

歌ふことなき若者に万葉のうた訓みよと釋きて老いに至りぬ

選者 岡井 隆

ソプラノの遠き歌ごゑわが愛のいたましき記憶にふれつつ昇る

選 歌 (詠進者生年月日順)

大阪府 永井千代

船うたも絶えたる茅渟ちぬの海中わたに島生あれていま一番機たつ

山形県 大瀧市太郎

紙切れを幹に押し当て歌しるす山人われに春は来にけり

長崎県 溝口みどり

卒業のうたはひとりのために流れ今日限り閉づ島の学校

福岡県 清田則雄

ゲートルの下に歌稿を巻き入れて北ボルネオゆ還りきにけり

神奈川県 上田富男

ちちははの歌ふをききしことぞなき歌ふに難たつきき生活なりしか

岩手県 菅川清志

杜氏らのみな揃ひしか塀こえて酒仕込歌街に流るる

新潟県 田辺保夫

歌ひつつ入学式に行く子らはどの子も母よりさきに歩めり

神奈川県 三宅新作

若き等が和して励ます手拍子に老人会の歌立ち直る

青森県 釜范頼子

かすかなる指揮棒の風に歌ふという君は点字の楽譜もち立つ

アメリカ合衆国
カリフォルニア州 吉富憲治

州越えて地図を頼りに着きし街夜霧の辻を聖歌隊過ぐ

佳 作 (詠進者生年月日順)

岐阜県 田口由美

妻と言ひ君と詠ませし二方ふたかたの歌会始めのお歌親しき

和歌山県 笹野富代

洗濯機の音にまぎれて老われはひそと唄ひぬ「ゆりかごの歌」を

宮城県 渡辺 清

持ち還りし万葉秀歌書架にあり開けば遠きいくさの匂ひす

長崎県 西海岩樹

二丁櫓に合はせて歌ふ父の声風ぎたる朝の海渡りゆく

鳥取県 宮脇常子

因幡守家持の歌碑鎮まりて雪の国府に鶴鴿あそぶ

福島県 馬目悦然
盃蘭盆のじやんがら念仏歌にのせ踊る浴衣の迎へ火に映ゆ

宮崎県 河野ササエ
舗装路にやうやく慣れし牛の子を引きゆく夫の歌聞こえくる

東京都 森田 皓
糸を繰る祖母の静かな歌につれ繭舞ふ如し桶の湯の中

岐阜県 長谷川武子
無口なる息子が祝宴に歌ひをりわが見しこともなき明かるさに

宮城県 相沢安子
風花の舞ふ過疎の村廃校の最後の校歌かすかに聞こゆ

北海道 奥泉一子
ふるさとを憶ふかなしみ消ゆるなくわが詠むうたはエトロフの歌

三重県 辻本侑代
在りし日の君と歌ひしマイ・ウェイをテープに聞けば春の雪舞ふ

熊本県 徳丸征子
春歌ふ音符のやうにさみどりの露のたう萌ゆ阿蘇の山裾

東京都 星 修一
楽しげに歌口ずさみ夕食を作りし母を思ひ出づるなり

東京都 福永 武
白髪の君ほろほろと酔ひ給ひ目を閉ぢ歌ふ蒙古放浪歌